

平成 28 年度第 1 回千葉県体育学会大会報告

理事長 西野明

学会大会の様子を全会員の皆様にお伝えするために、簡単ではありますが内容や参加者の声を掲載しました。たくさんの会員の皆様が、学会大会に参加して頂けることを願っております。

(実技セミナー)

2020 年東京オリンピック・パラリンピック企画

「みんなで参加、みんなで創る！」パラスポーツについて考えよう

上記のテーマにもとづき、今回は「ゴールボール」と「ブラインドサッカー」の体験会を開催しました。日本ゴールボール協会理事の近藤さん、増田さん、松本さんのご指導のもと、約 30 名の参加者が実際にゴールボールを体験しました。ゴールボールは視覚障害者のスポーツです。3 人 1 組となり、鈴が入った 1.25kg のゴム製ボールを転がせて、相手のゴールに入れば得点をゲットすることができます。2012 年ロンドンパラリンピックでは女子が金メダルを獲得しました。障害者スポーツには、ラインテープを貼る際にはひもを入れて、選手が手や足で確認できるようにされていること、晴眼者も一緒にできるようにアイシェードを着用することなど、様々な工夫がされています。改めて感心させられました。

ブラインドサッカーでは、日本代表の葭原さん（全盲者）、千葉大学 3 年生の高橋さん（晴眼者）のご指導のもと、約 30 名の参加者がアイマスクをつけて、実際に体験しました。ゴールボール同様にボールの中に鈴が入っており、その音をたよりにドリブルやパスを行っていました。また、コーラーからのサポートを受けながら、シュートを打ったりして、簡単なゲームを楽しんでいました。葭原さんのプレーを見ていると、ボールが見えているのではないかと思うぐらい、素晴らしいテクニックを披露して頂きました。

2020 年の東京パラリンピックでは、ゴールボール競技が幕張で開催予定です。その前に、ゴールボールを理解して、みんなで応援に

行きましょう。

● ゴールボール参加者の声（阿部さん）

最初に目隠しをされた際、不安と恐怖で身動きがとれませんでした。しかしいざ競技をしてみると、自分の感覚が研ぎ澄まされ、まるで世界が広がったかのような感覚を覚えました。それだけ新鮮な体験でした。これは見たり聞いたりするだけでは想像もつかないでしょう。百見は一体験にしかずです。視界をなくすことで広がる世界。とても刺激的でした。

● ブラインドサッカー参加者の声（來海さん）

ブラインドサッカーに興味があり、千葉大学で体験会をやるということで学生時代の同期数人で参加しました。大学までサッカーをやっていたので、目を閉じてでもボールコントロールはできるだろうという過信がありました。しかし、いざアイマスクをしてボールを蹴ってみるとドリブルはできても少し足元からボールが離れるだけで簡単にボールを見失ってしまいました。音が鳴ると言っても聞こえる音からイメージできるのはボールの3倍ほどの大きさのだけだいたいエリアだけで、選手がやっているようにすぐにボールを拾うことはなかなかできませんでした。目を塞いで行う運動体験はなかなか得難いもので、もっと多くこういったスポーツに触れられる機会があると良いと思いました。

（シンポジウム）

「東京オリンピック・パラリンピックの成功に向けて」

上記のテーマにもとづき、3名のシンポジストから貴重な講演をして頂きました。最初に、視覚障害陸上選手で2012年のロンドンパラリンピックに出場した渡辺紫帆さんからは、現地のボランティアから受けた心温まる話や実際の競技場面を映像で見ることができました。また、2020年の東京に向けて、若いボランティアが必要で、

そのために皆でできることを考えていきたいと思いますという提案が出されました。次に、千葉大学オリンピック学生団体おりがみ代表の都築則彦さんからは、団体設立の経緯や理念、さらにはこれまでの活動内容を紹介して頂き、オリンピックに関して、学生としてできることを、他大学と連携しながら進めていきたいという提案が出されました。最後に、千葉県スポーツコンシェルジュの大久保利宏さんからは、オリンピックに関する様々なデータを提示して頂き、オリンピックに対する世代間格差をなくし、オリンピックを機会に、日本のグローバル化を推進していくためには、若者の力が必要であるという提案が出されました。その後、フロアからの質問に対して、シンポジストが回答して、その内容を深めました。

●シンポジウム参加者の声（谷藤監事）

昨年に続き《2020年東京オリンピック・パラリンピック企画》に参加させて頂き、これまで知らなかったパラスポーツの世界により触れさせて頂きました。『ゴールボール、ブラインドサッカー体験！』は、実技のリードをされた協会の方や選手の方の雰囲気素晴らしく、参加されている方々が時間の経過に伴いどんどん楽しんでいく様子がとても印象的でした。アイマスクをすることで一緒にプレイしつつ、様々な人が協力しながら活動する、こうした場を少しでも多く作っていくことが重要だと思いました。

『東京オリンピック・パラリンピックの成功にむけて』シンポジウムでは、教育やスポーツ界で様々な経験をされてきた大久保先生、ロンドン・パラリンピック日本代表の渡邊選手、そして千葉大学オリ・パラ学生ボランティア団体おりがみ代表の都築さんのお話に非常に惹き込まれました。全盲で走り、跳ぶというのは私達には想像できない勇気と努力があったことと思いますが、渡邊さんのお話は終始ロンドンで触れたボランティアさんの極め細やかな心遣いのお話でした。渡邊さん登壇の際の大久保先生の紳士的なエスコートも非常に印象に残るものでした。2020年にはこうしたおもてなしのできる日本、千葉でありたいと改めて思いました。エネルギッシュな都築さんの話は、それが可能となる、それ以上のものになると感じさ

せてくれるものでした。パラスポーツは、知る機会がない者にとってはまだまだ敷居が高く感じられています。2020年東京オリ・パラが契機となり、こうした企画を通じてお互いの理解を深めていけたらと思います。最後になりましたが、素晴らしいプログラムを企画運営して下さった方々に深く感謝致します。ありがとうございました。

学会発表（報告者：坂本拓弥座長）

平成28年度第1回千葉県体育学会における、一般発表計5題について以下に報告したい。はじめに、研究助成報告として、日本大学の難波秀行氏より「女子大学生のライフスタイルと身体活動量・体力・身体組成の関係」について発表があった。これは、Web回答を用いた活動記録と体力・身体組成の関係を検討したものであった。フロアからは、調査対象学生の過去の運動歴やWebからの回答方法の利点や課題について質問がなされ、現代におけるスマートフォンの普及に対応していることや、低年齢段階の対象には使用の限界があることなどが述べられた。

続いて、一般発表の1題目として、千葉大学大学院の斉藤あかね氏より「4歳児における下肢の柔軟性と長座体前屈との関係について」の発表があった。これは、現行の幼児用の体力テストに柔軟性を測る指標がないことから、その必要性を検討するものであった。フロアからは、調査対象の日常的な運動経験やより詳細な調査方法についての質問がなされた。また2題目には、帝京平成大学の馬場宏輝氏より、「総合型地域スポーツクラブの経営に関する一考察：クラブと大学の関わりに着目して」と題された発表があった。この発表では、大学内に総合型地域スポーツクラブが設置されている例についての調査内容が報告された。質疑では、大学におけるクラブへの学生の関わり方や、クラブにおける大学の備品等の扱われ方について、議論が交わされた。

実践報告の部では、2題が発表された。まず、帝京平成大学の菊池瑞希氏から、「プロスポーツにおける集客と学生教育について：千葉ロッテマリーンズスポーツカレッジの取り組みから」という題の発

表がなされた。ここでは、千葉ロッテマリーンズが主催する、大学生主体の活動体であるスポーツカレッジについて紹介された。フロアからは、今年度大幅に上昇した集客数の内訳や、学生の活動内についての質問がなされ、継続中の活動として引き続き調査を続けていく旨が述べられた。また、2 題目の実践報告として、国際武道大学の廣瀬恒平氏より、「2015 年ラグビーワールドカップから 2019 年ワールドカップ、そして 2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けて」という題された発表があった。この発表では、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けてラグビー界ができることは何かを中心に、それを検討するために、廣瀬氏が実際に開催している研究会等の紹介があった。

●発表者の声（齋藤さん）

今回初めて本学会に参加させて頂き、また演題発表の場を頂戴しました。会場には様々な大学から集まった幅広い年齢層の参加者が集い、演題は多様性に満ちていました。ただ、どの内容も人について、地域について、スポーツについて何かしたいという共通の想いが感じられ、分野は違うけれど、千葉県体育学会のもとその想いを発信、共有したいと集まった仲間のような雰囲気も感じられました。

私はまだまだその仲間に入れるような身ではないと痛感いたしました。先生方の研究や取り組みを拝見し、自分の力のなさに落胆しつつも、もっと勉強しよう、次の学会に向けて頑張ろうと身を引き締めながら、家路につきました。

●参加者の声（長田さん）

学会というもののイメージは、大きなホールで行われ、スピーカーもオーディエンスも厳粛な雰囲気に包まれているものだと思っていました。しかし実際は全くの逆でした。午前中はブラインドサッカーとゴールボールを体験して参加者との交流を図り、午後の発表会では、真剣でありつつもどこかアットホームな空気が流れていたように感じました。そんな中、自らを発信している発表者の姿に憧

れを抱かせられ、次回の学会では私も発表者側に立ちたいと強く思う事のできた1日でした。